

<論文>

後期古英語における願望・命令表現の一考察
— 『ウェストサクソン福音書』の《山上の垂訓》を資料に —
On Expressions of Wish and Command in Late Old English
with Special Reference to the “Sermon on the Mount” in the *West-Saxon Gospels*

浦田 和幸
Kazuyuki Urata

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies

要旨: 英語における接続法の通時的研究の一環として、『ウェストサクソン福音書』(1000年頃)の「マタイ伝」の《山上の垂訓》を資料にして、後期古英語における「願望・命令表現」を調査した。独立節または主節における接続法現在、命令法、*nellen* (‘do not’; ラテン語の *nolite* に相当) による「願望・命令表現」を収集して、適宜、ラテン語の『ウルガータ聖書』と比較しながら、人称・極性・語順の点から分析した。主に以下の特徴が得られた。

- (1) 人称と法に関して、2人称では主に命令法が、3人称では接続法現在が用いられている。
- (2) 2人称で接続法現在を用いた例が若干見られるが、文脈からは命令法との間に意味合いの違いは感じられない。
- (3) 肯定の命令法は強調や対照のために時に2人称代名詞主語を伴うが、否定の命令法は全ての例において2人称代名詞主語を伴っている。
- (4) 語順に関して、接続法現在の場合は、肯定ではほぼ全て VS、否定では副詞の *ne* (‘not’) の後で VS、接続詞の *ne* (‘nor’) の後で SV である。命令法の場合は、肯定では全て VS、否定では副詞の *ne* (‘not’) の後で VS、接続詞の *ne* (‘nor’) の後で SV である。

最後に、有名な「主の祈り」を含む一節(「マタイ伝」6:5-15)は、願望・命令表現の諸特徴を具現していることを確認した。

Abstract:

This article examines expressions of wish and command in Late Old English based on the “Sermon on the Mount” in the Gospel according to St. Matthew in the *West-Saxon Gospels* (c. 1000), as part of the present author’s diachronic study of the subjunctive in English. This article analyses the expressions of wish and command in the present subjunctive and the imperative in non-dependent clauses, as well as negative commands expressed by the pattern <*nellen* (‘do not’) + infinitive>; cf. L. *nolite*), in terms of person, polarity (i.e. positive vs. negative) and word order. The Latin *Vulgate* from which the Old English version was translated is referred to when appropriate. Expressions of wish and command found in the Sermon on the Mount reveal such features as:

- (1) In terms of the grammatical person and the mood, the imperative is used only for the second person, while the present subjunctive is almost always used for the third person, with a few occurrences for the second person, in non-dependent clauses.
- (2) In the rare cases where the present subjunctive is used for the second person, no specific differences in meaning can be detected from the context as compared with similar cases where the imperative is used.



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed/ja>

(3) Positive imperatives sometimes have second person pronoun subjects (*bu* ‘thou’ / *ge* ‘ye’) for emphasis and/or contrast, while negative imperatives invariably have second person pronoun subjects.

(4) As for word order, in the positive present subjunctive clauses the order is almost always VS, while in the negative subjunctive clauses the order is VS after the negative adverb *ne* (‘not’) but SV after the negative conjunction *ne* (‘nor’). In the positive imperative clauses the order is always VS, while in the negative subjunctive clauses the order is VS after the negative adverb *ne* (‘not’) but SV after the negative conjunction *ne* (‘nor’).

To sum up, the passage concerning the “Lord’s Prayer” in the *West-Saxon Gospels* (Matt. 6:5-15) epitomises various Old English linguistic features of expressions of wish and command.

キーワード：古英語 願望・命令表現 接続法 命令法 『ウェストサクソン福音書』

Key Words：Old English, expressions of wish and command, subjunctive, imperative, *West-Saxon Gospels*

1. はじめに

英語における接続法の通時的変化を調査する一環として、筆者は新約聖書の「マタイ伝」を資料に時代を遡って調査してきた。浦田 (2005) では『ティンダル訳聖書』(*Tyndale Bible*, 1526) の「マタイ伝」により初期近代英語の最初期である 16 世紀前半の用法を、浦田 (2010) では時代を遡り後期中英語の文献である『ウィクリフ派聖書』(*Wycliffite Bible*, c. 1388) の「マタイ伝」により 14 世紀後半の用法を、浦田 (2018) ではさらに時代を遡り後期古英語の文献である『ウェストサクソン福音書』(*West-Saxon Gospels*, c. 1000) の「マタイ伝」により 11 世紀頃の用法の一端を記述した。そのなかで浮かび上がった留意点の一つは、独立節または主節において、接続法現在が願望・祈願や命令・勧告を表す用法と、命令法の用法との比較の必要性である。古英語では 2 人称単数の命令形と 2 人称複数の命令形に固有の形態があり、文法範疇として直説法や接続法と並んで命令法 (*imperative mood*) があった。古英語において、接続法現在と命令法が同じ文脈の中で用いられて意味の相違が判然としない場合や、形態上からは接続法現在と命令法の区別がつかない場合などが少なくない。そこで、小論では、後期古英語の『ウェストサクソン福音書』の「マタイ伝」により、独立節または主節に関して接続法現在と命令法の用法を比較検討することにする。

『ウェストサクソン福音書』は、1000 年頃にラテン語訳の『ウルガータ聖書』(*L. Vulgata*; *E. Vulgate*) から古英語に翻訳されたものである。(翻訳元のラテン語テキストについては不明だが、小論でラテン語訳聖書に言及する際には Weber-Gryson (2007), *Biblia Sacra iuxta Vulgatam Versionem* (第 5 版) を参照する。)

『ウェストサクソン福音書』には 8 つの写本が現存している。小論では、そのうち最も古い写本である MS Corpus Christi College 140 に依拠し、Skeat (1887) の刊本を用いて調査した。また、適宜、Liuzza (1994, 2000) を参照した。

さて、後期古英語の『ウェストサクソン福音書』「マタイ伝」の中で、形態の点から明らかに接続法と判断できる例は、筆者の現在までの調査では「接続法過去形」が 33 例、「接続法現在形」が 225 例見出された。後期中英語の『ウィクリフ派聖書』(後期訳) の「マタイ伝」の調査では、「接続法過去形」が 6 例、「接続法現在形」が 114 例であったのに比べると、「接続法過去形」で約 5 倍、「接続法現在形」で約 2 倍に上る。接続法現在形のうち、独立節または主節に生じたものは、『ウェストサクソン福音書』「マタイ伝」では 50 例、『ウィクリフ派聖書』(後期訳) の「マタイ伝」では 33 例であった。独立節または主節における接続法現在形は、現代でも(仮定法現在として) *God save the Queen!* (神が女王を守りたまえ—英国国歌) や、*Long live the Queen!* (女王さまが長生きされますように; 女王さま万歳) などの祈願文に残っている。また、*Suffice it to say that ...* は字義どおりには「it (= ... とすること) が十分であるとせよ」で、「... と言えば十分だろう; ... とだけ言っておこう」という意の成句。これらはかつての接続法現在の名残である。

次の節では、まず、『ウェストサクソン福音書』に関して、直説法と接続法、および命令法の語形を確認しておきたい。

2. 語形：接続法現在, 命令法

後期古英語期の 1000 年頃の『ウェストサクソン福音書』の四福音書における動詞の活用の概略は以下のとおりである。強変化動詞の *niman* (‘take’) と弱変化動詞第 1 類の *gelyfan* (‘believe’), 第 2 類の *lufian* (‘love’) を例にして, 直説法現在と接続法現在の活用を示す。¹

			直説法	接続法	直説法	接続法
現在	単数	1 人称	nime	nime	gelyfe	gelyfe
		2 人称	nimst	<u>nime</u>	gelyfst	<u>gelyfe</u>
		3 人称	nimð	<u>nime</u>	gelyfð	<u>gelyfe</u>
	複数	nimað	<u>nimon</u>	gelyfað	<u>gelyfon</u>	
現在	単数	1 人称	lufige	lufige		
		2 人称	lufast	<u>lufige</u>		
		3 人称	lufað	<u>lufige</u>		
	複数	lufiað	<u>lufion</u>			

形態上で接続法と直説法を判別できるのは, 下線で示した箇所である。強変化動詞の *niman* についても, 弱変化動詞の *gelyfan*, *lufian* についても, 現在時制では単数 2・3 人称と複数の場合に接続法の見分けがつく。次に, 命令法の語形を確認しておこう。命令法には 2 人称の単数形と複数形が固有の形態としてある。

命令法

2 人称	単数	nim	gelyf	lufa
3 人称	複数	mimað	gelyfað	lufiað

2 人称単数の場合は, 強変化動詞の *niman* についても, 弱変化動詞の *gelyfan*, *lufian* についても, 接続法と命令法の区別がつく。また, 2 人称複数の場合は, 強変化動詞の *niman* についても, 弱変化動詞の *gelyfan*, *lufian* についても, 形態上で接続法と命令法の区別がつく。しかし, 1, 2 人称の複数主語が後置された場合は語尾が *-e* に水平化され, 形態上は法の判別不能となる事例が少なくないが, これについては後に改めて触れることにする。²

¹ Liuzza (2000) の巻末グロッサリーに記された語形を参考にした。一部, 『ウェストサクソン福音書』には実際に生じなかった項もあるが, それらについては同種の語の活用の仕方からの類推で補った。直説法/接続法の形態上の判別の留意点については Mitchell (1978: §§ 112, 118), Mitchell (1985: §§ 601, 601a) などを参照。古英語期全般の動詞活用形の概要については Hogg (1992: 146-164) を参照。小論で扱う後期古英語より前の時代の 900 年頃の初期古英語の接続法の形態については久保内 (1971: 253-262) に詳細な分析がある。『ウェストサクソン福音書』の接続法の用法全般に関する記述的研究としては古典的著作の Henshaw (1894) があり, 現在でも参考になる。

² 古英語の命令文に関する個別研究として, 例えば Millward (1971) がある。命令法の形態と統語法に関する注意点については, 同書の書評の Mitchell (1974) が参考になる。また, Mitchell (1985: §§ 879-917, 1845) など。

3. 接続法現在と命令法の用法：概略

独立節または主節における接続法現在の用法について、Quirk and Wrenn (1957: 83) の簡潔な説明を下に引用する。接続法の主な用法 ((a)-(i)) について述べるなかの冒頭である。

The principal uses of the subjunctive are as follows:

(a) in non-dependent clauses expressing wishes and commands: *God ūre helpe* ‘may God help us’, *cild binnan ðrīteġum nihta sīe gefulwad* ‘let a child be (or a child must be) baptised within 30 nights’;

独立節における接続法現在は願望 (wishes) と命令 (commands) を表すとして、*God ūre helpe* (神が我らを助けたまえ) と、*cild binnan ðrīteġum nihta sīe gefulwad* (子供は 30 日以内に洗礼を受けさせるべし) という例を挙げている。*helpe* は *helpan* (‘help’) の接続法現在 3 人称単数、*sīe* は *beon* (‘be’) の接続法現在 3 人称単数である (Cf. 現代ドイツ語: 接続法第 1 式 *helfe, sei*)。願望と命令の意味合いは明確に区別できるものではないが、少なくとも命令を表しうるという点では、接続法現在は命令法と対比しうる。

初期古英語の接続法について考察した久保内 (1971: 262) は、「法」(Mood) を「事態・行為を言語的に表現する際の話者の心的態度の文法的呈示形式である」と定義して、直説法・接続法 (仮定法) ・命令法について次のように述べている。「その事態、行為の現実性・事実性あるいは実現性を主張することに自らを委ねようとするとき話者は直説法、あるいは命令法という言語形式を、そしてその主張に自らを委ねずあろうと考え、ある一定の距離を置かんとするとき仮定法という言語形式を用いるのである」と言うことができると思われる。」(久保内 (1971) では接続法は「仮定法」と呼ばれている。)

また、命令法については、「命令法」(Imperative) は話者の意志 (Will, Volition)、要求 (Request) を表わし、一見仮定法と近接した意味機能を持つように見えるが、事態・行為の現実性ないし実現性を主張することに自らを委ねる法であるから、われわれの定義によれば直説法と同系列に入れることができよう。これはまた、古英語期ですでに語形的に仮定法形と区別ができない場合もあり、消極的な証拠としてしか援用できないけれども、語形の上の関係からも言えるのではないかと思われる。」と述べたうえで、命令法 2 人称複数形に関して、「その語尾の *-að* が直説法のそれと同形であり一事実、古英語の命令法複数語尾はもともと直説法複数形の語尾 (3 人称複数形) であったものが拡張されたのである一、これは古英語の話者によって十分意識されていたところであろうと思われるからである。」(久保内 (1971: 263-264)) としている。話者の心的態度について、命令法を接続法と対峙させ、むしろ直説法と系列を同じくする面があることを指摘している点が興味深い。

古英語における命令法と接続法との関係について、Traugott (1992: 185) は以下のように述べている。

Because the imperative and subjunctive contrast morphologically, we must assume that there was a difference in meaning, at least in early OE times, between more and less directive, more and less wishful utterances. By the time of Alfredian OE this difference was losing ground in many registers; nevertheless, the subjunctive continues to be preferred in monastic and legal regulations; charms, medical prescriptions and similar generalised instructions are normally in the subjunctive.

少なくとも古英語の初期には、命令法と接続法の間には、指図を表すか願望を表すかの程度の違いがあったと想定されるが、アルフレッド王時代 (9 世紀後半) までには次第に多くの使用域で両者の違いは衰退しつつあった。しかし、接続法は修道院や法律上の規則のほか、指図を示す場面などで引き続き好んで普通に用いられた。Traugott のこの見解から察すると、小論が対象とする後期古英語では命令を表す際の接続法と命令法の意味の相違は判然としないことが予想される。

小野・中尾 (1980: 393) は、勧告・命令などを表す接続法 (仮定法) の 2 人称の場合に関して、「単数 *rið* (þu)

/ride þu (=ride (thou)), 複数 ridap (ge) / ride(n) ge (=ride (you)) のように命令法と仮定法が別形の場合は、仮定法の方がおだやかな勧告、忠告などを表すとも考えられるが、両形が同一文に用いられることも少なくない」と述べている。両者の意味合いに差がないと思われる場合があることを示唆している。

ここで、1人称と2人称の複数主語 (we ‘we’, ge ‘ye’) が後置された場合に、法の形態上の区別が失われる現象に触れておく。Campbell (1959: 296-297) の説明を見てみよう。

When a pronoun of the 1st or 2nd pers[on]. follows, the pl[ural]. endings *-ap*, *-on*, *-en* can be reduced to *-e*, e.g. *rīde we*, *ge*. The final consonant of monosyllabic forms can be dropped under the same circumstances, e.g. *fō we* ‘let us take’. Such forms are mainly W-S [=West-Saxon] ...³

1人称の複数主語 (we ‘we’) が後置され、*-ap*, *-on*, *-en* という複数語尾が *-e* に水平化して *rīde we* になると、直説法 (肯定の倒置 ‘ride we’, あるいは疑問文 ‘ride we...?’) か、接続法 (‘let us ride’) のいずれであるか、形態上からは区別がつかない。また、2人称の複数主語 (ge ‘ye’) が後置され *rīde ge* になると、直説法 (肯定の倒置 ‘ride ye’, あるいは疑問文 ‘ride ye...?’) か、命令法 (‘ride (ye)’) か、接続法 (‘ride (ye)’) か、形態上からは区別がつかない。また、*fōn* (‘take’) のような単音節語の場合、1, 2人称の複数主語が後置されると、*fōp* / *fōn* の語尾の子音が脱落して *fō we* / *ge* となり、形態上の法の区別が失われる。接続法を分析する際には、直説法との形態上の区別に加え、接続法現在の場合には命令法との形態上の区別に留意する必要がある。中英語以降は言うに及ばず、古英語においても、人称と数によっては形態上の区別が失われた場合が少なくない。形態上から判別不能の場合には統語環境や文脈が法の見分けの助けになりうるが、それらはあくまでも二次的な基準と考えるべきであろう。

Mitchell (1985: §883) は、強変化動詞の *helpan* (‘helpan’) を例に、命令法・接続法・直説法の見分け方に関する語形変化表を示している。1人称複数形の *helpe we*, 2人称複数形の *helpe ge* / *helpap ge* / *ge (...) helpap* のように、純粋に形態上からは法の区別がつかない (Mitchell が “ambiguous” と分類する) 型については特に注意が必要である。また、*wite* (<witan ‘know’), *ga* (<gan ‘go’), *beo* (<beon ‘be’) などは、2人称単数形で用いられた場合には命令法にも接続法にもなりうる点に注意を喚起している。頻度の高い動詞であるだけに、分析の際には注意が必要である。

願望や祈願、命令や勧告を表す表現をまとめて、小論では「願望・命令表現」と呼ぶことにする。表現形式としては、主に接続法現在や命令法が用いられる。また、2人称複数に対する否定の命令表現として、<*nellen ge* + 不定詞> という型がある。*nellen* は *nyllan* (<ne ‘not’ + *willan* ‘will, wish’) の接続法現在2人称複数形で、ラテン語の *nolite* (<*nolle* ‘be unwilling to, wish not to’ の命令法現在2人称複数形; 禁止 (don’t...)) を表す) に相当する表現である。*nellen ge* は、*nelle ge*, *nellon ge* という異形も見られた。(以下では *nelle(n) ge* として示す。)

小論では『ウェストサクソン福音書』の「マタイ伝」(5:3-7:27) の《山上の垂訓》(Sermon on the Mount) に見られる願望・命令表現について総合的に記述することを目指す。《山上の垂訓》はイエスがガリラヤ湖畔の山の上で群衆を前に弟子たちに行ったとされる説教で、イエスの教えの中に願望・命令表現が多く見られ、後に名句として人口に膾炙している言葉が少なくない。⁴

³ 引用文中で分音符号が付いた *ġ* は [j] の音を表す。*ge* は2人称複数代名詞の主格で、初期近代英語では *ye* と綴られる。次第に、本来は目的格の *you* と融合して、2人称複数主格は *you* となった。

⁴ Cf. 寺澤 (2010: 13): 「イエスが弟子たちを連れてガリラヤ湖を望む小高い丘に上り、そこで後にキリスト教の真髄となるべき説教 — いわゆる ‘山上の垂訓 [説教]’ (the Sermon on the Mount ; 「マタイ」 5:3-7:27) を語り聞かせた。(中略) 山上で説教されたことは、モーセ (Moses) が神から十戒 (Ten Commandments) を授けら

《山上の垂訓》における願望・命令表現の生起数は、接続法現在、命令法、*nelle(n) ge* に関して次のとおりである。独立文あるいは主節における用例数を示す。

<願望・命令表現>

・接続法現在	11 例
・命令法	52 例
・ <i>nelle(n) ge</i>	8 例
・接続法現在／命令法	1 例

なお、「接続法現在／命令法」としたものは、形態上からは両者の区別ができないものである。*ne winne ge* (5:39) の *winne* は形態上 *winnan* (‘fight, struggle’) の接続法現在か命令法の可能性がある。小論では願望・命令表現に関して接続法現在と命令法の用法比較を行う際には、「接続法現在／命令法」のこの 1 例は考察から省くことにする。

人称別に見ると、接続法現在と命令法の生起状況は以下のとおりである。(否定命令を表す *nelle(n) ge* は 2 人称複数主語の *ge* (‘ye’) を従えており、対象は 2 人称複数に限られる。ちなみに、「マタイ伝」の他の箇所 (1:20) には、2 人称単数主語の *þu* (‘thou’) を伴う *nelle þu* も見られる。)

<人称>

・接続法現在	2 人称	2 例	(単数 1, 複数 1)
	3 人称	9 例	(単数 9)
・命令法	2 人称	52 例	(単数 31, 複数 21)

願望・命令表現として、接続法現在は主に 3 人称に、命令法は 2 人称に対してのみ用いられている。2 人称に対する否定命令の *nelle(n) ge* も加え、それぞれの代表的な例を下に挙げる。例を引用する際には、最初に『聖書 新共同訳』の当該の節全体の日本語訳を挙げる。次いで、『ウェストサクソン福音書』の古英語の願望・命令表現の例、そして、比較のために適宜『ウルガータ聖書』の該当箇所を併記する。古英語とラテン語の引用例には逐語的な近現代英語訳を添える (2 人称代名詞の単数・複数を区別するために、単数は *thou/thy/thee* で、複数 *ye/your/you* で訳す)。(古英語の文を引用する際には、Skeat(1887) で用いられている省略記号は展開して通常の綴りの ‘and’, ‘þæt’ (‘that’) で示す。引用例中のイタリック、下線、囲み線は筆者。)

<接続法現在 3 人称単数> (9 例中の 1 例を引用)

- ・施しをするときは、右の手のすることを左の手に知らせてはならない。(6:3)

(1) *Soplice þonne þu þine ælnessan do. nyte þin wynstre hwæt do þin swyþre* (‘Truly when thou dost thy alms, let not thy left hand know what thy right hand doth.')

[ウルガータ: *te autem faciente elemosynam nesciat sinistra tua quid faciat dextera tua* (‘But when thou dost alms, let not thy left hand know what thy right hand doth.’)]

nyte は *nytan* (<*ne* ‘not’ + *witan* ‘know’) の接続法現在 3 人称単数。*nyte þin wynstre* の語順は VS で、「あな

れたのがシナイ山 (Mount Sinai) であったことに照応している (cf. 「出エジプト記」 20:2-17 ; 「申命記」 5:6-21)。おそらく、本来はイエスが折にふれて教えた教訓をここにまとめたものであろう。」

たの左手が知ることのないようにせよ」の意。ラテン語の *nesciat* は *nescire* (< *ne* ‘not’ + *scire* ‘know’) の接続法現在 3 人称単数, *nesciat sinistra tua* の語順は VS で, 「あなたの左手が知ることのないようにせよ」の意。下線部の古英語訳は『ウルガータ聖書』とほぼ同一構造である。古英語訳で接続法現在 3 人称単数を用いた願望・命令表現 9 例のうち, 7 例は『ウルガータ聖書』でも接続法現在 3 人称単数が用いられていた。(他の 2 例は, 異なる構文からの訳し変えであった。)

<命令法 2 人称単数> (31 例中の 1 例を引用)

・(しかし, わたしは言っておく。悪人に手向かってはならない。) だれかがあなたの右の頬を打つなら, 左の頬をも向けなさい。(5:39)

(2) *ac gyf hwa þe slea on þin swyþre wenge. gegearwa him þæt oðer*; (‘but if anyone strikes thee on thy right cheek, offer him the other.’)

[ウルガータ: *Sed si quis te percusserit in dextera maxilla tua praebe illi et alteram* (‘But if anyone shall have struck thee on thy right cheek, offer him also the other.’)]

gegearwa は *gegearwian* (‘prepare, offer’) の命令法 2 人称単数, *gegearwa him þæt oðer* は「彼にもう片方(の頬)を差し出せ」の意。ラテン語の *praebe* は *praebere* (‘offer’) の命令法現在 2 人称単数, *praebe illi et alteram* は「彼にもう片方(の頬)も差し出せ」の意。下線部の古英語訳は『ウルガータ聖書』とほぼ同一構造である。古英語訳で命令法 2 人称単数を用いた願望・命令表現 31 例のうち, 19 例は『ウルガータ聖書』で命令法現在 2 人称単数形が用いられていた。(他の 12 例は, 命令法未来 2 人称単数, 直接法未来 2 人称単数, 接続法現在 2 人称単数, 接続法完了 2 人称単数などからの訳出であった。)

<命令法 2 人称複数> (21 例中の 1 例を引用)

・求めなさい。そうすれば, 与えられる。探しなさい。そうすれば, 見つかる。門をたたきなさい。そうすれば, 開かれる。(7:7)

(3) *Biddað and eow bið geseald. seceaþ and ge hit findað. cnuciað. and eow biþ ontyned*; (‘Ask, and it will be given you. Seek, and ye will find it. Knock, and it will be opened for you.’)

[ウルガータ: *Petite et dabitur vobis / quaeite et inuenietis / pulsate et aperietur vobis* (‘Ask, and it will be given you; seek, and ye will find; knock, and it will be opened for you.’)]

biddað, seceaþ, cnuciað は, それぞれ *biddan* (‘ask, pray’), *secan* (‘seek’), *cnucian* (‘knock’) の命令法 2 人称複数で, 「求めよ」「探せ」「(門を) たたけ」の意。ラテン語の *petite, quaeite, pulsate* は, それぞれ *petere* (‘ask, beg’), *quaerere* (‘seek’), *pulsare* (‘knock’) の命令法現在 2 人称複数で, 「求めよ」「探せ」「(門を) たたけ」の意。ラテン語では <命令法 + et (‘and’) ...> の繰り返しで, 古英語訳は『ウルガータ聖書』と同一構造である。

<*nelle(n) ge* + 不定詞> (8 例中の 3 例を引用)

nellen ge が 5 例, *nelle ge* が 2 例, *nellon ge* が 1 例見られた。それぞれ 1 例ずつ挙げておく。「ウルガータ聖書」の該当箇所では命令法現在 2 人称複数の *nolite* (‘do not’) が用いられていた。

・あなたがたは地上に富を積んではならない。(そこでは, 虫が食ったり, さび付いたりするし, また, 盗人が忍び込んで盗み出したりする。)(6:19)

(4) *Nellen ge gold-hordian eow gold-hordas on eorþan.* ('Do not store up for yourselves treasures on earth.')

[ウルガータ : *nolite thesaurizare* vobis thesauros in terra ('Do not store up for yourselves treasures on earth.')]]

・わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ, と思っはならない。(廃止するためではなく, 完成するためである。) (5:17)

(5) *Nelle ge wenan þæt ic come to wurpan þa æ oððe þa witegan.* ('Do not think that I came to cast away the law or the prophets.')

[ウルガータ : *Nolite putare* quoniam veni solvere legem aut prophetas ('Do not think that I came to cast away the law or the prophets.')]]

・断食するときには, あなたがたは偽善者のように沈んだ顔つきをしてはならない。(偽善者は, 断食しているのを人に見てもらおうと, 顔を見苦しくする。はっきり言うておく。彼らは既に報いを受けている。) (6:16)

(6) *Soðlice þonne ge fæston. nellon ge wesan.* swylce lease licceteras. ('Truly when ye fast, do not be like the false hypocrites.')

[ウルガータ : *Cum autem ieiunatis nolite fieri* sicut hypocritae tristes ('And when ye fast, do not be, as the hypocrites, sad.')]]

以上, 願望・命令表現の代表例として, 3人称で接続法現在が用いられた例, 2人称で命令法が用いられた例, 2人称の否定命令で *nelle(n) ge* が用いられた例を見た。

次に, 接続法現在が願望・命令表現として用いられる際の有標の用法として, 2人称の場合を見てみよう。単数と複数が1例ずつである。複数, 単数の順で例を挙げる。

<接続法現在 2人称 (複数)> (全1例を引用)

・神聖なものを犬に与えてはならず, また, 真珠を豚に投げてはならない。(それを足で踏みにじり, 向き直ってあなたがたにかみついてくるだろう。) (7:6)

(7) *Nellen ge syllan þæt halige hundum. ne ge ne wurpen* eowre mere-grotu toforan eowrum swynon. ('Do not give the holy [*i.e.* what is holy] to dogs, nor must ye cast your pearls before swine.)

[ウルガータ : *Nolite dare sanctum canibus / neque mittatis* margaritas vestras ante porcos ('Do not give the holy [*i.e.* what is holy] to dogs, nor must ye cast your pearls before swine.)

古英語訳は『ウルガータ聖書』の直訳である。前半部は *nellen ge* に始まる否定命令, 後半部は接続法現在2人称複数の *wurpen* (<weorpan 'throw') を用いた否定命令である。ラテン語では, 前半部では *nolite*, 後半部では接続法現在2人称複数の *mittatis* (<mittere 'send, throw') が用いられている。なお, 古英語訳の後半部の最初の *ne* は接続詞 ('また〜ない' の意) で, ラテン語の *neque* ('nor, and not') に相当する。後半部の接続法現在 (*wurpen / mittatis*) による否定命令は, 前半部の *nellen ge / nolite* による否定命令と同一文中で並置されており, 等価の表現法と言ってよいであろう。(ギリシャ語原典では, 前半部の動詞は $\delta\acute{\omega}\tau\epsilon$ (<διδόναι 'give'), 後半部の動詞は $\beta\acute{\alpha}\lambda\lambda\eta\tau\epsilon$ (<βάλλειν 'throw') で, ともに接続法アオリスト2人称複数である。ギリシャ語では, 前半部と後半部は法・時制の点で同一であった。)

<接続法現在 2 人称 (単数)> (全 1 例を引用)

・あなたがたも聞いているとおおり、「姦淫するな」と命じられている。(5:27)

(8) Ge gehyrdon þæt on ealdum cwydum gecweden wæs; Ne unrihtæme ðu (‘Ye (have) heard that it was said in old sayings: Thou must not commit adultery.’)

[ウルガータ: Audistis quia dictum est antiquis non moechaberis (‘Ye have heard that it was said to those of ancient times: Thou shalt not commit adultery.’)]

unrihtæme は *unrihtæman* (‘commit adultery’) の接続法現在 2 人称単数である (Cf. 命令法 2 人称単数であれば語尾の *-e* は付かず, *unrihtæm* が本来の形態)。『ウルガータ聖書』の該当箇所では直説法未来 2 人称単数の *moechaberis* (<*moechari* ‘commit adultery’) が用いられ, *non moechaberis* (‘Thou shalt not commit adultery’) と記されていた。ラテン語では直説法未来で表された否定命令を, 古英語では接続法現在で訳した例である。しかし, ラテン語の同様の例を古英語では命令法で訳した例もある。「姦淫するな」はモーセの十戒の 7 番目の戒めにあたるが, 比較のために, 6 番目の戒めの「殺すな」に言及する《山上の垂訓》の箇所を見てみよう。

・あなたがたも聞いているとおおり, 昔の人は「殺すな。(人を殺した者は裁きを受ける)」と命じられている。(5:21)

(9) Ge gehyrdon þæt gecweden wæs on ealdum tidum; Ne ofsleh þu. (‘Ye (have) heard that it was said in old times: Do not thou kill.’)

[ウルガータ: audistis quia dictum est antiquis non occides (‘Ye have heard that it was said to those of ancient times: Thou shalt not kill.’)]

「殺すな」を意味する *Ne ofsleh þu* では, 命令法 2 人称単数の *ofsleh* (<*ofslean* ‘kill’) が用いられている (Cf. 接続法現在 2 人称単数であれば *ofslea*)。『ウルガータ聖書』の該当箇所は直説法未来 2 人称単数の *occides* (<*occidere* ‘kill’) を用いて, *non occides* (‘Thou shalt not kill’) と記されていた。

接続法現在の *Ne unrihtæme ðu* と命令法の *Ne ofsleh þu* は形態上で法の違いはあるが, この文脈の中で否定命令の表現法として, 接続法のほうがおだやかな勧告や忠告などを表すというような意味合いの違いがあるとは考えられない。*Ne unrihtæme ðu* (5:27) については, 動詞形が命令法 2 人称単数の *unrihtæm* になっている写本もある。2 人称の否定命令表現に関して, 命令法と接続法の間で少なからず揺れがあることの証左と言えよう。

また, 傍証として, 『ウェストサクソン福音書』の「マルコ伝」(10:19) では, 『ウルガータ聖書』の *ne adulteres* (‘thou must not commit adultery’; *adulteres* は *adulterare* ‘commit adultery’ の接続法現在 2 人称単数) を *ne unrihtæm þu* と命令法で訳している。一方, ベネディクト会修道士のアルフリック (Ælfric: c. 950–c. 1010) による旧約聖書の最初の七書 (Heptateuch) の古英語訳の「申命記」(5:18) では, 『ウルガータ聖書』の *neque moechaberis* (‘nor shalt thou commit adultery’; *moechaberis* は *moechari* (‘commit adultery’) の直接法未来 2 人称単数) を *ne unrihtæme þu* と接続法現在で訳している。いずれにせよ, 「マルコ伝」(10:19) と「申命記」(5:18) の古英語訳 (命令法 vs. 接続法現在) で, 「姦淫するなかれ」という否定命令の意味合いに特段の違いは感じられない。英語史の流れの中では次第に音が弱化していずれは消失する運命をたどる変化語尾 *-e* の有無が, 当時の後期古英語でどの程度厳密に区別されていたかは疑問である。接続法現在の *unrihtæme* と命令法の *unrihtæm* などの語形上の微妙な区別が, 次第に曖昧になりつつあったのではないかと推測される。⁵

⁵ Cf. Mitchell (1985: §892): “It is tempting to dismiss apparent examples in which the second person subjunctive

以上、独立節または主節における願望・命令表現の代表的な例を見てきた。ところで、《山上の垂訓》では主節が従属節を伴って命令を表す例が2例見られたので、別途、下に挙げておく。ic secge eow þæt ('I tell you that ...') で始まる文である。

・しかし、わたしは言うておく。一切誓いを立ててはならない。天にかけて誓ってはならない。(そこは神の玉座である。) (5:34)

(10) Ic secge eow soþlice þæt ge eallunga ne swerion. ne þurh heofon. ('I tell you truly that ye should not swear at all, neither by heaven.')

・だから、言うておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。(命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。) (6:25)

(11) forþam ic secge eow þæt ge ne sin ymbhydige eowre sawle hwæt ge eton. ne eowrum lic-haman mid hwam ge syn ymbscrydde; ('therefore I tell you that ye should not be anxious about your soul [or life], what ye should eat, nor about your body, with what ye should be clothed.')

(10) (11) はともに、secgan ('say') に続く þæt ('that') 節内で命令的接続法 (mandative subjunctive) が用いられた例である。(10) の swerion (< swerian 'swear'), (11) の sin (< beon 'be') は接続法現在 2 人称複数である。『ウルガータ聖書』の該当箇所では、(ego) dico vobis ('I say to you') に続いて、(10) では不定詞を、(11) では接続法現在を用いて否定命令が表されていた。

4. 極性：肯定 vs. 否定

願望・命令表現に関して、肯定と否定の分布を見てみよう。全体としては、肯定が 53 例、否定が 19 例であった。命令法、接続法現在、接続法現在／命令法、nelle(n) のそれぞれの用例数は括弧内のとおり。

<極性 (全体)>

- ・肯定：53 例 (命令法 45, 接続法現在 8)
- ・否定：19 例 (命令法 7, 接続法現在 3, 接続法現在／命令法 1, nelle(n) 8)

肯定の場合には命令法が圧倒的であるが、否定の場合には命令法に劣らず他の表現も用いられている。用例を観察して特筆すべきこととして、命令法の否定 7 例は全て主語を伴う。命令法では肯定か否定かで主語の有無の傾向に大きな違いがある。他方、接続法現在はそもそも主語を伴うのが原則であり、また、nelle(n) については、《山上の垂訓》では全て nelle(n) ge のように 2 人称代名詞の ge ('ye') を主語として後に従えている。では、命令法について主語の有無を肯定と否定ごとに確認しておこう。主語の有無は+と-で示す。

expresses a wish or exhortation as scribal errors or as genuine forms showing late confusion of endings." Cf. also Mitchell (1985: §895): "The examples with -e in the singular could also be explained away as errors or the result of late confusion; see, for example, Campbell's remarks on gemun / gemune (OEG [=Old English Grammar], p. 345 and [footnote]. 1.)" Campbell (1959: §767 (p. 345)) では、geman ('remember') の命令法単数 -mun, 命令法複数 -munab に付した脚注で、"Later the subjunctival imper[ative]. gemune, -en is used." と記されている (下線は筆者)。「接続法的命令形」という表現が注意を引く。過去現在動詞の geman ('remember') に関して、元来は接続法の gemune, -en (つまり、-e, -en 語尾) が命令法として用いられるようになったという。

<命令法>

- ・<-主語> : 42 例 (肯定 42)
- ・<+主語> : 10 例 (肯定 3, 否定 7)

《山上の垂訓》において、命令法の肯定では主語を明示するのは例外的、否定では主語を伴うのが規則である。古英語一般に関して、Mitchell (1985: §887, 890) は肯定の命令では “[m]ost commonly there is no subject pronoun”, 否定の命令では “the pronoun is usually expressed” と述べている。また、同書 (§913) では “the general tendency is for the 2nd pers[on]. pron[oun]s. *þu* and *ge* to be expressed in negative clauses but not in positive ones” と記されている。⁶ 古英語において、肯定命令では <-主語> が無標、逆に否定命令では <+主語> が無標である。

古英語訳で主語がある場合とない場合とについて『ウルガータ聖書』の該当箇所を確認すると、明らかに傾向が異なる。古英語訳で <-主語> の 42 例に関しては、ラテン語で 36 例 (86%) が命令法であった。一方、古英語訳で <+主語> の 10 例に関しては、ラテン語で命令法であったのは 2 例 (20%) に過ぎなかった。(他は直説法未来, 接続法現在, 接続法完了, *nolite*, その他であった。)

では、命令法で主語が表れた <+主語> に関して、有標の肯定の場合と、無標の否定の場合の例を見ておこう。まず、主語を伴う肯定命令は以下のとおりである。

<+主語> : 肯定命令 (全 3 例を挙げる)

- ・(その供え物を祭壇の前に置き, まず行って兄弟と仲直りをし,) それから帰って来て, 供え物を献げなさい。(5:24)

(12) and þonne *cum þu* syððan and *bring þine* lac; (‘and then come thou afterwards and bring thy offering.’)

[ウルガータ : et tunc *veniens offers* munus tuum (‘and then coming thou offerest thy gift.’)]

古英語訳では *cum* (< *cuman* ‘come’) も *bring* (< *bringan* ‘bring’) もともに命令法であり, *cum* が主語の *þu* (‘thou’) を伴っている。ところが、『ウルガータ聖書』では構文が異なり, 古英語の *cum* に該当する箇所は *venire* (‘come’) の現在分詞の *veniens* で, 古英語の *bring* に該当する箇所は *offere* (‘offer’) の直説法現在 2 人称単数の *offers* である。しかし, ラテン語訳聖書の版によっては直接法未来 2 人称単数の *offeres* (‘thou shalt offer’) になっているものもあるため (Cf. 古英語期の『リンディスファーン福音書』のラテン語本文), 古英語訳者はそれに基づき, *et tunc veniens offeres munus tuum* (‘and then coming thou shalt offer thy gift’; 「そしてそれから来て, あなたは供え物を献げるべし」) を命令法で表現したのではないかと推測される。⁷ 古英語訳では

⁶ Mitchell (1985: §913) は, 否定命令では 2 人称主語が表れ, 肯定命令では表れないという一般的傾向に関連して, (真偽のほどは保留しながら,) ゲルマン語の原初の状況に関する Behaghel (*Deutsche Syntax. Eine geschichtliche Darstellung*. (Heidelberg, 1923-1932): ii, §677) の以下の説に言及している: “der Imperativ steht wie idg. so auch germanisch ursprünglich nur bei positiver Aufforderung; die negative Aufforderung wird durch den Konj. ausgedrückt’ [‘in G[er]m[ani]c., as in I[ndo]-E[uropean], the imperative was originally used only for positive commands; negative commands were expressed by the subjunctive’].”

⁷ ギリシャ語原典の該当箇所は *καὶ τότε ἐλθὼν πρόσφερε τὸ δῶρόν σου* (‘and then coming offer thy gift’) である。*ἐλθὼν* は *ἔρχεσθαι* (‘come’) のアオリスト分詞男性主格単数, *πρόσφερε* は *προσφέρειν* (‘offer’) の命令法現在 2 人称単数。「そしてそれから来て, あなたの供え物を献げなさい」の意。

命令法の *cum* が主語 (*þu*) を伴うことにより、兄弟と仲直りしたあと、「あなた (自身) は帰って来て、供え物を捧げよ」というように主語を強調する効果があると思われる。

・あなたを訴える人と一緒に道を行く場合、途中で早く和解しなさい。(さもないと、その人はあなたを裁判官に引き渡し、裁判官は下役に引き渡し、あなたは牢に投げ込まれるにちがいない。) (5:25)

(13) *Beo þu onbugende þinum wiðer-winnan hraðe þa hwile þe ðu eart on wege mid him* ('Be thou yielding to thy enemy quickly while thou art on the way with him')

[ウルガータ : *Esto consentiens adversario tuo cito dum es in via cum eo* ('Be agreeing with thy enemy quickly while thou art in the way with him.')]]

Beo þu ('Be thou') は、『ウルガータ聖書』の *Esto* (*esse* 'be' の命令法未来 2 人称単数) を訳出したものである。⁸ この引用部は (12) [5:24] に続く箇所である。腹を立てることを戒めるくだりで、直前の 5:23-24 で供え物を献げる場面に言及したあと、ここでは自らを訴える者とともに道行く場面に言及している。内容の変わり目で命令文の主語 *þu* ('thou') を明示することにより、聞き手の注意を喚起する効果があると思われる。

・だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。(これこそ律法と預言者である。) (7:12)

(14) *Eomustlice ealle þa þing ðe ge wyllen þæt men eow don. doþ ge him þæt sylfe.* ('Therefore all the things that ye wish that men should do to you, do ye the same to them.')

[ウルガータ : *Omnia ergo quaecumque vultis ut faciant vobis homines et vos facite eis* ('All things therefore whatever ye wish that men should do to you, do ye also to them.')]]

この一節はキリストの教えの要とされる黄金律 (*golden rule*) である。人々にしてもらいたいことを「あなたがた自身」も人々に行いなさいという意味で、古英語訳 *doþ ge* ('do ye') の 2 人称複数主語の *ge* は対比的な強調を示し、効果的に表現されている。『ウルガータ聖書』でも命令法現在 2 人称複数の *facite* (<*facere* 'make, do') が 2 人称複数代名詞の *vos* ('ye') を伴っている。ギリシャ語原典は οὕτως καὶ ὑμεῖς ποιεῖτε αὐτοῖς ('thus do ye also to them') で、命令法現在 2 人称複数の *ποιεῖτε* (<*ποιεῖν* 'make, do') が 2 人称複数代名詞の *ὑμεῖς* ('ye') を伴っていた。ただし、語順に関して、ギリシャ語とラテン語では SV (*ὑμεῖς ποιεῖτε / vos facite*) であるが、古英語では VS (*doþ ge*) である点が異なる。

次に、主語を伴う否定命令の例を見てみよう。命令法を用いた否定命令は 7 例あり、そのいずれも主語を伴うものであった。(15)(16)(17) は主語が 2 人称単数の *þu / ðu* ('thou'), (18) は 2 人称複数の *ge* ('ye') の例であ

⁸ (13) の *beo* は、語形上は *beon* ('be') の 2 人称単数の命令法と接続法の可能性がある。しかし、ここでは、本文中で直前の節にあたる 5:24 が命令法から成り、5:25 も同じ口調で別の観点から述べる箇所であるので、文脈から判断して *beo* を命令法と見なす。なお、上に引用した (12) では前半部の古英語は省略したが、5:24 の冒頭には *læt þær þine lac beforan þam altare* ('leave there thy gift before the altar') という <S> の命令法の節があり、5:24 の古英語訳は全体が命令文から成っている。なお、『ウルガータ聖書』の「マタイ伝」全体でラテン語の *esto* もしくは *estote* (*esse* 'be') の命令法未来 2 人称単数もしくは複数) は 5 例ある。それらに対する古英語訳は、*beo, beo þu, beo ge* が 1 例ずつ、*beoð* が 2 例である。最初の 3 つは語形上では命令法/接続法現在の区別がつかないが、*beoð* は明らかに命令法 (2 人称複数) である。このことから判断しても、他の 3 例に関して、ラテン語の命令法未来 (*esto / estote*) が古英語の命令法に訳されていると見なしてよいであろう。Cf. *esto / estote* (2:13, 5:25, 5:48, 10:16, 24:44).

る。

<+主語> : 否定命令 (7例中の4例を挙げる)

・(また, あなたがたも聞いているとおり, 昔の人は,) 「偽りの誓いを立てるな。(主に対して誓ったことは, 必ず果たせ」と命じられている。) (5:33)

(15) **ne** forswere þu; ('do not thou swear falsely')

[ウルガータ : **non** peierabis ('thou shalt not swear falsely')]

forswere は *forswerian* ('for swear, swear falsely) の命令法2人称単数, 語順の点では <ne VS> である。『ウルガータ聖書』の *peierabis* は *peierare* ('perjure, swear falsely') の直接法未来2人称単数であった。

・(求める者には与えなさい。) あなたから借りようとする者に, 背を向けてはならない。 (5:42)

(16) and þam ðe [wylle] æt þe borgian **ne** wyrn þu him; ('and him who will (i.e. wishes to) borrow from thee, do not thou refuse him.')

[ウルガータ : et volenti mutuari a te **ne** avertaris ('and from him wishing to borrow from thee, thou must not turn away.')

wyrn は *wyman* ('refuse') の命令法2人称単数, 語順は <ne VS> である。『ウルガータ聖書』の *avertaris* は *avertere* ('turn') の接続法受動態現在2人称単数であった。

・また, あなたの頭にかけて誓ってはならない。(髪の毛一本すら, あなたは白くも黒くもできないからである。) (5:36)

(17) **Ne** ðu ne swere þurh þin heafod. ('Nor must thou swear by thy head.')

[ウルガータ : **neque** per caput tuum iuraveris ('nor must thou swear by thy head')]

swere は *swerian* ('swear') の命令法2人称単数。語順は, 文頭の接続詞 *ne* (ラテン語の *neque* 'nor, and not' に相当) に続いて, <Sne V> である。(2番目の *ne* は否定の副詞。) 『ウルガータ聖書』の *iuraveris* は *iurare* ('swear') の接続法完了2人称単数であった。(ラテン語では <ne + 接続法完了2人称> は禁止命令を表す。)

9

・だから, 明日のことまで思い悩むな。(明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦勞は, その日だけで十分である。) (6:34)

(18) **Ne** beo ge na hogiende ymb þa morgenlican neode. ('Be not ye caring about the need of tomorrow.')

[ウルガータ : *nolite* ergo esse solliciti in crastinum ('Do not therefore be anxious about tomorrow.')

9 Cf. 松平・国原 (1980: §613) : 「二人称における最も一般的な禁止文は (イ) **nē** + 接続法・完了か, (ロ) **nōlī, nōlīte** (*nōlō* の命令法) + 不定法・(現在) で表わされる。(イ)の方がいっそう強制的な感じをもち, (ロ)の方が儀礼的である。」また, 中山 (2007: p. 93) は要求の接続法の用法の1つとして, 禁止 (*prohibitīvus*) について次のように記している: 「接続法完了の2人称に **nē** をつけて, 命令法の否定とする (日常語では接続法現在でも)。」 Cf. also Gildersleeve and Lodge (2009 [1895]): §263 2 (a), (b)).

一方、肯定で SV は下記の 1 例のみであった。

<接続法現在 (肯定) : SV> (全 1 例を引用)

- ・「妻を離縁する者は、離縁状を渡せ」(と命じられている。) (5:31)

(22) swa hwylc swa his wif forlæt. he sylle hyre. hyra hiwgedales boc; ('Whoever divorces his wife, he must give her a bill of divorce.')

(22) では、複合関係詞の *swa hwylc swa* ('whoever') で始まる節が冒頭にあり、それを人称代名詞 *he* で受けている。「マタイ伝」全体で見て、*swa hwylc swa* ('whoever') で始まる文の後半部の語順は、このように SV が普通である。

次に、接続法現在の否定では、倒置の VS が 2 例、SV は 1 例であった。VS の場合は、2 例とも副詞の否定辞 *ne* ('not') が前置している。一方、SV の例では、接続詞の *ne* ('nor') が前置している。Mitchell (1985: §907) は、副詞の *ne* あるいは接続詞の *ne* で始まる節の語順の相違に関して、副詞の場合には常に倒置の <*ne* (副詞) + V S> であるとし、それと対比して接続詞の場合の <*ne* (接続詞) + S V> の例を挙げている。《山上の垂訓》における下記の 2 例は対照的である。

<接続法現在 (否定) : VS> (2 例中の 1 例を引用)

- ・(あなたがたも聞いているとおり,) 「姦淫するな」(と命じられている。) (5:27)

(23) [=8] Ne unrihtcæme ðu ('Thou must not commit adultery.')

<接続法現在 (否定) : SV> (全 1 例を引用)

- ・神聖なものを犬に与えてはならず、また、真珠を豚に投げてはならない。(それを足で踏みにじり、向き直ってあなたがたにかみついてくるだろう。) (7:6)

(24) [=7] Nellen ge syllan þæt halige hundum. ne ge ne wurpen eowre mere-grotu toforan eowrum swynon. ('Do not give the holy [*i.e.* what is holy] to dogs, nor must ye cast your pearls before your swine.')

(23) では副詞の *ne* ('not') の後で VS という倒置語順が見られる。定形第 2 位の原則に従う。一方、(24) では接続詞の *ne* ('nor') の後では倒置は起こらず、*nellen* ('do not') で始まる前半部の否定節に重ねて、後半部では否定節が SV 語順で続いている。

5.2. 命令法

次に、主語を伴う命令法の語順について見てみよう。

<命令法の願望・命令表現 (+主語)>

- ・肯定 : 3 例 VS: 3 例 (5:24, 5:25, 7:12)
- ・否定 : 7 例 VS: 6 例 (5:21, 5:33, 5:42, 6:5, 6:13, 6:34)
SV: 1 例 (5:36)

肯定では 3 例とも VS であった。肯定の 3 例については、主語を伴う肯定命令について検討した例文 (12) (13) (14) のとおりである。

他方、否定ではほぼすべて VS であったが、1 例だけ SV の例が見られた。副詞の ne ('not') で始まる 6 例では VS であるが、接続詞の ne ('nor') で始まる 1 例では SV であった。副詞の ne と接続詞の ne の例を挙げる。

<命令法 (否定) : VS> (6 例中の 1 例を引用)

・(祈るときにも,) あなたがたは偽善者のようであってはならない。(偽善者たちは、人に見てもらおうと、会堂や大通りの角に立って祈りたがる。はっきり言うておく。彼らは既に報いを受けている。) (6:5)

(25) **ne** beo ge swylce liceteras. ('be not ye like the hypocrites.')

<命令法 (否定) : SV> (全 1 例を引用)

・また、あなたの頭にかけて誓ってはならない。(髪の毛一本すら、あなたは白くも黒くもできないからである。) (5:36)

(26) [= (17)] **Ne** ðu ne swere þurh þin heafod. ('Nor must thou swear by thy head.')

(25) では、副詞の ne のあとで VS 語順 (beo ge) になっている。(26) は、直前の「しかし、私は言うておく。一切誓ってはならない。天にかけて誓ってはならない。そこは神の玉座である。／地にかけて誓ってはならない。そこは神の足台である。エルサレムにかけて誓ってはならない。そこは偉大な王の都である。」(5:34-35) という否定命令を受けて、さらに否定を重ねる箇所である。「また～ない」という意味の接続詞 ne のあとでは倒置せず、SV 語順 (ðu ne swere) になっている。(S と V の間の ne は副詞。)

6. 「主の祈り」における願望・命令表現

最後に、《山上の垂訓》のうち、神への祈り方についてイエスが説く箇所 (6:5-15) を例に取り上げて、談話の中で願望・命令表現を見ておきたい。イエスが弟子たちに教えた祈禱の模範である「主の祈り」(Lord's Prayer) (6:9-13) の前後を含めて引用する。最初に『聖書 新共同訳』から全体を引用し、願望・命令表現に相当する部分に下線を施す。同様に、それに対応する『ウェストサクソン福音書』の箇所にも下線を施し、下線部の古英語表現を順に確認する。(古英語のテキストは Skeat (1887) に基づくが、読みやすさのために句読点と大文字／小文字を若干編集した。)

⁵ 「祈るときにも、あなたがたは偽善者のようであってはならない。偽善者たちは、人に見てもらおうと、会堂や大通りの角に立って祈りたがる。はっきり言うておく。彼らは既に報いを受けている。⁶ だから、あなたが祈るときは、奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が報いてくださる。⁷ また、あなたがたが祈るときは、異邦人のようにくどくどと述べてはならない。異邦人は、言葉数が多ければ、聞き入れられると思いついでいる。⁸ 彼らのまねをしてはならない。あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。⁹ だから、こう祈りなさい。「天におられるわたしたちの父よ、御名が崇められますように。¹⁰ 御国が来ますように。御心が行われますように、天におけるように地の上にも。¹¹ わたしたちに必要な糧を今日与えてください。¹² わたしたちの負い目を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように。¹³ わたしたちを誘惑に遭わせず、悪い者から救ってください。」¹⁴ もし人の過ちを赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたの過ちをお赦しになる。¹⁵ しかし、もし人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの過ちをお赦しにならない。」 (6:7-15)

⁵ And þonne ge eow gebiddon, ne beo ge swylce liceteras; þa lufiað þæt hig gebiddon hi standende on ge-somnungum and stræta hyrnum, þæt men hig geseon. Soþ ic secge eow, Hig onfengon hyra mede. ⁶ Ðu soþlice, þonne þu ðe gebidde, gang into þinum hed-clyfan, and þinre dura belocenre, bide þinne Fæder on dihlum; and þin Fæder þe ge-syhð on dihlum hyt agylt þe. ⁷ Soðlice þonne ge eow gebiddon, nelle ge spreca fela swa swa hæðene; hig wenað þæt hi sin gehyrede on hyra menigfealdan spæce. ⁸ Nellen ge eomostlice him ge-efenlæcan; soðlice eower Fæder wat hwæt eow þearf ys ær þam þe ge hyne biddað. ⁹ Eornustlice gebiddað eow ðus: Fæder ure þu þe eart on heofonum, Si þin nama gehalgod. ¹⁰ To-becume þin rice. Gewurpe ðin willa on eorðan swa swa on heofonum. ¹¹ Urne gedæghwamlican hlaf syle us to dæg. ¹² And forgyf us ure gyltas, swa swa we forgyfað urum gyltendum. ¹³ And ne gelæd þu us on costnunge, ac alys us of yfele. Soþlice. ¹⁴ Witodlice gyf ge forgyfað mannum hyra synna, þonne forgyfþ eower se heofenlica Fæder eow eowre gyltas. ¹⁵ Gyf ge soðlice ne forgyfað mannum, ne eower Fæder ne forgyfð eow eowre synna.

5 節では、イエスは複数の 2 人称 (ge ‘ye’) に向けて語っている。ne beo ge swylce liceteras (‘be not ye like the hypocrites’) では、副詞の否定辞 ne のあとに VS 語順の命令法 (beo ge) が続いている。

6 節では、イエスが語りかける相手は 2 人称単数 (þu ‘thou’) に変わる。命令法 2 人称単数の gang (<gangan ‘go’), bide (<biddan ‘pray’) で始まる肯定の命令節がある。肯定命令の gang into þinum hed-clyfan (‘go into thy bedchamber’) と bide þinne Fæder on dihlum (‘pray to thy Father in secret’) では、主語はない。¹⁰

7 節から 9 節の前半部までは、イエスが語りかける相手は再び複数の 2 人称 (ge ‘ye’) に戻る。7, 8 節では、否定命令の <nelle(n) ge + 不定詞> を用いて, nelle ge spreca fela (‘do not speak much’), Nellen ge eomostlice him ge-efenlæcan (‘do not earnestly imitate them’) という戒めが表現されている。9 節では前半部で命令法 2 人称複数形の gebiddað (<gebiddan ‘pray’ (often with reflexive)) を用いて Eornustlice gebiddað eow ðus (‘Therefore pray (yourselves) thus’) と述べたあと、後半部は Fæder ure þu þe eart on heofonum (‘Our Father, thou who art in heaven’) という呼びかけで始まり、13 節の終わりまでは 2 人称単数である「天の父」に対する祈りが示されている。文法的な形式としては接続法現在や命令法を用いて、願望・祈願が表現されている。

9 節から 10 節にかけては、接続法現在 3 人称単数の si (<beon ‘be’), to-becume (<to-becuman ‘come, arrive’), gewurpe (<geweorðan ‘be done/fulfilled’) を用いて, Si þin nama gehalgod. (‘May thy name be hallowed.’), To-becume þin rice. (‘May thy kingdom come.’), Gewurpe ðin willa on eorðan... (‘May thy will be done on earth...’) という願いが述べられている。祈願文の典型例である。語順はいずれも VS。

11, 12 節では、命令法 2 人称単数の syle (<syllan ‘give’), forgyf (<forgyfan ‘forgive’) を用いて, Urne gedæghwamlican hlaf syle us to dæg. (‘Give us our daily bread today.’), forgyf us ure gyltas (‘forgive us our guilts’) という願いが述べられている。

13 節でも命令法を用いて祈願を表しているが、前半は否定文、後半は肯定文で、主語の有無に関して対照的である。前者では命令法 2 人称単数の gelæd (<gelædan ‘lead’) が用いられ、副詞の否定辞 ne (‘not’) で始まる ne gelæd þu us on costnunge (‘do not thou lead us into temptation’) では <ne V S> という、主語を伴う倒置の否定構造になっている。一方、後者では命令法 2 人称単数の alys (<alysan ‘release, save’) で始まる alys us of yfele (‘save us from evil’) は肯定命令で、主語を伴っていない。主語の有無、および語順に関して、13 節は否定と肯

¹⁰ 『聖書 新共同訳』で「戸を閉め」の部分は、『ウルガータ聖書』では et cluso ostio tuo (‘and thy door (being / having been) shut’) で、絶対的奪格 (L. ablativus absolutus ‘ablative absolute’) で表現されている (現代英語の独立分詞構文に相当)。奪格を有しない古英語では与格で訳され (→dative absolute 絶対的与格), þinre dura belocenre (‘thy door (being / having been) locked’) と表現されている。þinre dura (<þin duru ‘thy door’) は女性単数与格の名詞句, belocenre (<belucan ‘lock’) は女性単数与格の過去分詞。Cf. Mitchell (1978: §191.4.)

定の命令文の典型例である。

7. おわりに

以上、小論では、接続法現在が独立節または主節で願望・命令を表現する用法を出発点に、動詞形および意味の点で近似する命令法と併せて、願望・命令表現について考察した。『ウェストサクソン福音書』「マタイ伝」の《山上の垂訓》を資料に、接続法現在、命令法、否定命令の *nellen* ('do not') を用いた願望・命令表現の用例を検討した。*nellen* はラテン語の *nolite* (禁止を表す) に相当する表現で、<*nelle(n) ge* + 不定詞> の型で 2 人称複数の否定命令を表す。命令法と接続法に関しては、2 人称では主に命令法が、3 人称では接続法現在が用いられている。2 人称で接続法現在を用いた例も若干見られたが、収集した例に関する限り、文脈からは接続法の方が命令法よりもおだやかな勧告や忠告などを表すというような意味合いの違いは感じられなかった。

極性に関しては、否定の命令法は全て主語を伴っていることが特徴である。肯定の命令法では強調や対照のために主語を伴う例が若干見られたが、通例、主語は表現されない。語順に関しては、接続法現在では肯定の場合にはほぼ全て VS、否定の場合には副詞の否定辞 *ne* ('not') の後では VS、接続詞の *ne* ('nor') の後では SV であった。主語を伴った命令法については、肯定の場合には全て VS、否定の場合には副詞の否定辞 *ne* の後では VS、接続詞の *ne* の後では SV であった。

『ウェストサクソン福音書』は『ウルガータ聖書』からの翻訳であり、ラテン語法の影響を受けていることは否めない。また、《山上の垂訓》という限られた資料ではあるが、後期古英語における願望・命令表現の用法の特徴を垣間見ることができた。前後を含めて引用した「主の祈り」のくぐりには願望・命令表現から成っているとと言っても過言ではなく、小論で考察した諸特徴を凝縮して具現している。

参考文献

- ・一次資料 *参照した聖書の版等

<古英語訳>

The Gospel according to Saint Matthew in Anglo-Saxon, Northumbrian, and Old Mercian Versions, Synoptically Arranged, with Collations Exhibiting All the Readings of All the MSS. Edited by Walter W. Skeat. Cambridge: Cambridge University Press, 1887.

The Old English Version of the Heptateuch, Ælfric's Treatise on the Old and New Testament and his Preface to Genesis. E.E.T.S. o.s. 160. Edited by S. J. Crawford. London: Oxford University Press.

<ラテン語訳>

Biblia Sacra iuxta Vulgatam Versionem. 5th edition by Robert Weber and Roger Gryson. Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 2007.

<原典> (ギリシャ語)

Nestle-Aland: *Novum Testamentum Graece.* 28th edition by the Institute for New Testament Textual Research, Münster/Westphalia, under the direction of Holger Strutwolf. Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 2012.

<日本語訳>

『聖書 新共同訳』共同訳聖書実行委員会 日本聖書協会 1987.

- ・二次資料

Campbell, A. 1959. *Old English Grammar.* Oxford: Clarendon Press.

Gildersleeve, B. L. and G. Lodge. 2009 [1894]. *Gildersleeve's Latin Grammar.* Mineola, New York: Dover Publications.

Henshaw, Alonzo Norton. 1894. *The Syntax of the Indicative and Subjunctive Moods in the Anglo-Saxon Gospels.* Leipzig-R., Printed by O. Schmidt.

- Hogg, Richard M. 1992. “Phonology and Morphology” in *The Cambridge History of the English Language*. Vol. I: *The Beginnings to 1066*, edited by Richard M. Hogg. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 67-167.
- Liuzza, R. M. 1994. *The Old English Version of the Gospels*. Vol. I: Text and Introduction. EETS. O.S. 304.
- _____. 2000. *The Old English Version of the Gospels*. Vol. II: Notes and Glossary. EETS. O.S. 314.
- Millward, Celia M. 1971. *Imperative Constructions in Old English*. The Hague: Mouton.
- Mitchell, Bruce. 1974. “Review of *Imperative Constructions in Old English*. By Celia M. Millward.” *English Studies*. 55: pp. 387-389.
- _____. 1978. *A Guide to Old English*. Oxford: Basil Blackwell.
- _____. 1985. *Old English Syntax*. 2 vols. Oxford: Clarendon Press.
- Quirk, Randolph and C. L. Wrenn. 1955. *An Old English Grammar*. London: Methuen.
- Traugott, Elizabeth Closs. 1992. “Syntax” in *The Cambridge History of the English Language*. Vol. I: *The Beginnings to 1066*, edited by Richard M. Hogg. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 168-289.
- 久保内端郎 1971 「初期古英語の仮定法 — その形態と用法」 『一橋大学研究年報 人文科学研究』13号: pp. 243-279.
- 松平千秋・国原吉之助 1985 『新ラテン語文法』(11版) 南江堂.
- 中山恒夫 2007 『古典ラテン語文典』 白水社.
- 小野茂・中尾俊夫 1980 『英語史 I』 大修館書店.
- 寺澤芳雄 2010 『名句で読む英語聖書 — 聖書と英語文化』 研究社.
- 浦田和幸 2005 「初期近代英語における接続法 — Tyndale 訳聖書をめぐって」 『言語情報学研究報告』(東京外国語大学大学院地域文化研究科 21 世紀 COE プログラム 「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」) No. 7: pp. 467-482.
- _____. 2010 「後期中英語における接続法の用法について — 『ウィクリフ派聖書』 「マタイ福音書」を資料に」 『東京外国語大学論集』 81号: pp. 447-465.
- _____. 2018 「後期古英語における接続法の用法: 接続法過去の場合 — 『ウェストサクソン福音書』 「マタイ伝」を資料に」 『東京外国語大学論集』 97号: pp. 305-329.

執筆者連絡先: urata.kazuyuki@tufs.ac.jp

原稿受理: 2020年2月24日